

Title	人類学の存在論的転回における概念創造という方法の条件と問題：創造から他律的変容へ
Sub Title	A methodological condition of concept creation and its problem in the ontological turn in anthropology : from creation to heteronomous transformation
Author	相原, 健志(Aihara, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.49 (2017.) ,p.1- 15
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20171231-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人類学の存在論的転回における概念創造という 方法の条件と問題 ——創造から他律的変容へ

相原 健志

序

人類学において存在論的転回が叫ばれて久しい。ヘナレらによって上梓された存在論的転回のマニフェスト的論文以降 [Henare et al. 2007], およそ十年の間, 人類学のみならず他学問も巻き込みながら, 人類学の大きな思潮として成立しつつある。本稿は, この存在論的転回の見取り図を描き, とりわけ最も頻繁に言及される二人の人類学者——マリリン・ストラザーンとエドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ——から, この転回に内在する方法論的問題について, 理論的観点から解答することを試みる。その問題とは, この転回のアジェンダにして方法である概念創造がいかなる条件によって可能であり, そこにいかなる限界が内在しているか, である。

まず次章では, 存在論的転回の全体像を見て, この問題の位置づけを確認することから始める。そのあと上記二人の議論を検討しながら, 概念創造という方法の条件とは何かを考察する。その際の焦点は, フィールドの人々が行う思考のあり方と, 人類学者の思考のあり方との関係である。そして, この解答の延長上に, 誰が思考している主体なのかという観点から, この概念創造というアジェンダ自体が, ある種の過剰さと危険を内包していることを指摘する。そして最後に, 本論の結論をまとめた上で, 今後の展望を指摘する。

1. 「存在論的転回」の焦点：概念創造

1.1 存在論とは何か

存在論的転回の方角性は多岐に渡るが、全体として以下のような点に特徴が求められる。マリノフスキー以来、人類学にとっておそらく最も大きな前提であった、多文化・単一自然主義を相対化すべく、フィールドの人々が行っている思考のあり方を撰取しようとする事、である [Henare et al. 2007]。それは決して、自然という単一のあり方をするものに対して人々がなす異なるものの方角——表象や信念など——を解釈し、説明し、撰取することで我々の認識を多様化することではなく、われわれ自身の世界それ自体が別様でありうることを示すことだとされる。この大きな狙いについて、久保が整理したところによれば、「調査対象となる人々にとっての世界の有様を彼らに固有の『信念』や『世界観』の産物としてではなく、彼らの実践における世界のありかたそのもの（=存在論）として捉えることが試みられる」 [久保 2016: 191-192; cf. 春日 2011]。

このように大まかな方角性と野心は共有するとはいえ、ホルブラッドとピーダーセンの分類によれば、この相対化の目標地点は様々でありうる [Holbraad & Pedersen 2017]。例えば、いわゆる科学技術社会論から発展したアクターネットワーク理論が企図するように、世界のあり方あるいは諸存在・事物のあり方の統一的な理論を示そうとするものがある [Holbraad & Pedersen 2017: 43]。一方で、世界をこのように単一の——いふなれば形而上学的な [マニグリエ 2016] あるいは普遍的な——絵図に回収することなく、個々の社会や文化をその深奥で律し、そしてそれらの間で互いに異なる、ある意味では特定の社会固有の内的原理としての存在論があると考へ、存在論を複数で多様な——この意味で相対的な——ものとする立場がある [Blaser 2014; Henare et al. 2007; Pedersen 2013; Scott 2013; Vigh & Sausdal 2014]¹⁾。両者とも、存在者のなかに人間のみならず、動物や植物、さらには精霊、神話的な存在者などを含めている点では共通する一方で、その存在論が及ぶ範囲について、より拡張的な前者と、より限定的な後者という違いがあると言える。存在論的転回におけるこうした立場の違いは、既に言及したようにこの転回が他学問を巻き込んで展開されていると同時に、人類学の内部でも多様な思潮が背景にあることに由来するとも考へられる [cf. 久保 2016: 192-194]。

1) この相対的な存在論において、「存在論」という語は、ほぼ「世界 (world)」と同義語で用いられているように見える。それは上記の久保の引用にも言える。

1.2 概念創造

このとき、西洋的存在論——多文化・単一自然主義——を相対化する上で、その方法的側面に着目したい。その方法とは、フィールドの人々の思考・概念をもって、新しい概念を再構成し、人類学という学問の内部で新しい概念を創造すること、である [Henare et al. 2007; Holbraad & Pedersen 2017; Pedersen 2013; Scott 2013: 865]。人類学者がフィールドに赴いたとき、人類学者がふつう有するような、例えば贈与の概念では、マオリで交換される贈与品が贈与者の魂が含まれているということは理解できないことに気づく。そこで人類学者は、彼らの贈与の実践を把握するとともに、手持ちの贈与の概念と魂の概念を新しいものへと変容させ、また「贈与品には贈与者の魂が含まれる」という概念を、我々人類学者の知に新たに加えるのだ。存在論的転回が企図する概念創造は、存在論という語の定義が論者によって単一なのか普遍的なのかそれとも多様で相対的なのかという点は異なっているけれども、人類学者の手持ちの概念を再帰的に再構成するという道筋を辿る点でおおまかに共通した傾向が見られる。

とはいえ概念とは認識論の問題なのではないか、それは存在論的転回が批判するところの多文化・単一自然主義に与しているのではないかと疑問を持つかもしれない。新しい概念を創造することは、結局のところ、単一である自然を対象とし、それに対する新しい見方を生み出しているに過ぎないのではないかと。そのマニフェスト的論文においてヘナレらは、多文化・単一自然主義的機制において区別されている概念（認識=文化）ともの（事物=自然）は、むしろ同一の存在であると論じる [Henare et al. 2007]。彼女らは、キューバの呪術で使用される粉は、治療を実現する力そのものであると好んで言及する。それは、粉という事物（自然）に対して、おそらく西洋の人間がするのは異なり、それが力であるという別の見方をしているのではない。多文化・単一自然主義的機制において認識と事物の両者が、表象するものと表象されるものとして区別されるのとは逆に、粉は力そのものであり、よって粉と力は同一であると論じるのだ。概念は、単なる認識のことではない。それは、認識と事物という分割を消失したところにある、一つの存在である——そして、キューバの粉は、我々が知る粉とは、別の異なる存在だとされる。ヘナレらは、「ある異なる粉(…)を想像する (conceive of) とは、それを概念すること (conceive) ——それを思考し、存在させることである。というのも、ここで思考とはまさに存在であるからだ」と述べる [Henare et al. 2007: 14-15]²⁾。これをホルブラッドとピー

2) 以下特に指示がない限り、傍点強調は原著者による。また、外国語文献の引用は原則筆者による私訳だが、既存の邦訳を参考にしたときは、[原著者 原著発行年：頁数=邦訳発行年：頁数]と

ダーセンはより一般的にまとめ、「存在論的転回は、(…)『別様に見る』という問題ではない。何よりもまず、異なるものを見ることである」と述べる [Holbraad & Pedersen 2017: 6]。同じ事物に対する異なる見方ではなく、そもそも事物として異なっている——よって、我々とフィールドの人々では、そもそも見ている世界が異なる。再度述べておけば、こうしてその概念を人類学者が手にすることで、先述の西洋的存在論の相対化がなされていくのである。

1.3 概念創造という方法の条件という問い

以上のように、フィールドの人々の概念をもってして人類学者の手持ちの概念を更新し、新しい概念を創造する——存在論的転回という人類学のプロジェクトの要諦の、少なくとも一端はここにあると言えるだろう。しかしここで問題なのは、こうして新しい概念が創造される時、それはいかにして可能なのか、ということだ。これは、概念創造という問題が人類学においてなぜ主張可能なのかという問いではない³⁾。むしろ、何がしか新しい概念が創造されることを可能にする条件とは何か、という問いである。

中空と田口は、メラネシアにおける「分人 (dividual)」概念について、本稿がのちに論及するストラザーンの功績も考慮しつつ、それがいかなる研究史上先行する理論の問い直しとして生まれ展開したかを考察した [中空・田口 2016]。ホルブラッドとピーダーセンも同様に、創造された概念の新しさについて論じ、ロイ・ワグナーの「文化」やストラザーンの「関係」概念などを事例とした [Holbraad & Pedersen 2017]。これらは、創造された具体的な概念がどの古い概念に対して新しいかを、その来歴を辿って考察した試みと言える。しかし、上記の試みは概念創造という「方法」 [Henare et al. 2007; Viveiros de

いう形で示す。思考と存在の同一性は、筆者がヴィヴェイロス・デ・カストロに関して報告したように [相原 2016]、また 2.2 で言及する身体的情動に典型的に言えるように、(おそらく哲学者ジル・ドゥルーズを経由した) スピノザ哲学の影響と考えられる。将来的に存在論的転回を人類学だけでなく、哲学を含めた人文学および社会科学の枠組で横断的な研究が行われるならば、スピノザ哲学を考慮する必要があるが、本稿はその場ではない。

- 3) この問いは、ホルブラッドとピーダーセンが一定程度解答している。その要点は、存在論的転回は人類学における方法の「強化=強度化 (intensification)」である、という点にある [Holbraad & Pedersen 2017]。つまり、概念を、それが外界の事物を表象する外延的なものから、事物と同一のものである強度的な存在へと定義を変更したことにあると考えられる。この概念論の背景にはドゥルーズの圧倒的な影響があり [Deleuze et Guattari 1991; Jensen & Rødje 2010]、彼らも、また本稿がのちに論及するヴィヴェイロス・デ・カストロもその影響関係を隠そうとしない [e.g. Viveiros de Castro 2009]。

Castro 2009: 12] それ自体の考察ではなく、具体的な概念の創造過程を辿り返すもの、あるいは概念創造という方法が適用された事例の考察だった。もしこの転回が旧来の概念を更新して新しい概念を創り出すことを企図する、いわば概念の相対化に焦点を充てるならば、具体的な概念の具体的な創造過程のみならず、その概念の相対化の方法自体も相対化すべきなのではないか。久保は、存在論的転回を行先を展望する中で、「相対化に伴走しながらも」「相対化を通じた相互作用を分析する知」が必要とされると述べていた [久保 2016: 199]。上記の二つの研究は、この課題に対応したものだろう。しかし、概念創造という方法の具体的な使用ではなく、その方法の形式、あるいはその方法を可能にする条件を明確化し、そしてそれによって概念創造という方法論を洗練させることは、この転回にとりもう一つの内在的な課題なはずである。概念創造が「方法」である限りにおいて、概念の具体的な創造過程だけでなく、概念創造という方法それ自体を検討しなければ、この転回のコアの半面を捉えたにとどまるだろう。

そこで本稿はこれより、この問いに取り組む。この転回において重要視される二人の論者を挙げ、概念創造という方法がいかなる条件をもって達成されると共通して言えるかを理論的に検討する。先述のように、概念はまずもってフィールドに由来するとされていた。すると、概念創造の条件を考えることは、フィールドの人々と人類学者の思考のあり方の関係を問うことでもある。この点に焦点を絞って、次章より、ストラザーン、ヴィヴェイロス・デ・カストロの順に見ていこう。

2. 概念創造の条件

2.1 イメージの並置：ストラザーンの場合

まず、メラネシアをフィールドとしたストラザーンを見る。とりわけここでは、彼女の議論においてイメージと呼ばれるものの間の関係に着目する。

彼女の民族誌記述の実践の最大の特徴は、フィールドの人々が行うことやそこにある事物の根底にある論理に、その記述を並置させることにある。では、その論理とはいかなるものなのか。彼女は、そのフィールドにおける様々な実践や人工物が、一種のイメージとして複雑な関係をもって結ばれているという。例えば

地中に根を張って立つ樹木は、根を中空に広げる逆転された樹木を予示している。それぞれのイメージは、諸要素からなるごく特定の配置を提示しているが、それと同時

に、その効果においてその他の配置の拡張となる。葬送儀礼における逆転された樹木は、森に生えている垂直の樹木という観念、あるいは同じように、石垣で囲われた空間が象徴する水平の「樹木」という観念から派生^{アウトグロウ}=成長してきたものとなる。この転倒は、文字通り比喩的なものである。成長、反転、切断はいずれも、あるイメージが別のイメージに取って代わる仕方であてられるメラネシア的な隠喩である [Strathern 2004: 113=2015: 269-270]。

ある一つのイメージ（例えば、自然に生えている樹木）は、儀礼において用いられる加工された樹木と反転的な関係にある。各イメージは、このように「成長、反転、切断」などの隠喩的な関係によって——しかし部分的な関係によって——互いに接続する⁴⁾。一見すると、そこで接続されるイメージは、我々の常識からは奇妙に見える。上記の樹木であれば、樹木同士が接続されることに違和感はないかもしれないが、しばしば言及されるように、人間の身体、笛、カヌー、家屋といったイメージを接続することもありうる [e.g. 里見・久保 2013; cf. Strathern 2004: 63-72=2015: 173-189]。いずれにしても、以上のような隠喩的關係においてフィールドの各イメージは相互に接続される。ストラザーンにおいてあるイメージが別のイメージと隠喩的關係にあるとき、一方は他方から創造されたものであり、「切断は（…）創造性という意味をなす」とされる [Strathern 2004: 111=2015: 265]。

そして彼女は、民族誌という人類学者の仕事も、これらのイメージ間関係の延長上に接続する。すなわち、人類学者の記述および概念も一つのイメージとして、フィールドの各イメージに、その隠喩的關係をそのまま利用して、接続あるいは並置される。久保はこれを簡潔に整理し、「メラネシアの諸実践のうちに潜在するそれらの実践を説明する固有の論理に可能な限り沿う形で学問的分析概念を用いる」と述べる [久保 2016: 198; cf. 里見・久保 2013; Strathern 2004: 107-109=2015: 255-259]。あるいはストラザーン自身が決定的な形で言うように、「観察されているものに当てはまることは、観察の仕方にも当てはまる」 [Strathern 2014: 7]。人類学が蓄積してきた概念を適用してメラネシアの諸実践などを分析するのではなく、むしろ矢印を逆向きに変更し、メラネシアの論理つまり隠喩的な関係を用いて人類学をメラネシアに接続する。それは、人類学者の既存の概念を再構成す

4) もちろん、これは自己包含関係として概念化され、これらの諸イメージの接続は、彼女の独特の比較概念と密接に関わるが [e.g. Strathern 2004]、ここでは以下に論ずるように、ストラザーンにおいて民族誌がメラネシアの諸イメージに並列的に接続されることが確認できれば十分と考える。

る仕掛けなのである [cf. 森田 2011]。先述のように、あるイメージが別のイメージに接続しているとき、一方が他方から「創造」されたとするならば、そこに同じく接続される人類学の諸概念もまた、同様に「創造」されたものだと言える。

イメージが別のイメージを「成長、反転、切断」などによって、生産する。人類学者の概念もまた、これらのイメージである。よって概念の創造は、フィールドの人々の思考の論理に人類学者のそれが接続され、あるいは並置されることによって達成されると言える。

2.2 差異の関係の転置：ヴィヴェイロス・デ・カストロにおける「翻訳」と「言い間違い」

同様に、ブラジルのアマゾニア先住民社会をフィールドとするヴィヴェイロス・デ・カストロの議論に移ろう⁵⁾。

彼は、それらの先住民社会——とりわけアラウエテ、17世紀のトゥピナンバ——を対象として、かつては食人という実践において、また現在では神話などの形で、他者に変身することがその社会構造の根本原理であると述べる [Viveiros de Castro 1992, 2009, 2011]。例えば、アラウエテにかつて多くいた戦士は、他民族との戦争において捕えた捕虜と同一化することでアラウエテにとっての敵になる。のちに食人が政治的影響により禁止されたこともあって実際の食人は行われなくなったが、現在では食人が宇宙論などのモチーフとして残存している。アラウエテは死したのち、天上に昇り、そこで神々に食べられる。すると彼らが今度は神々となって、やがて昇天してくるアラウエテの人々を食べる。その意味で、アラウエテの生者は中間的な状態を生きるとされ、昇天し神々になってようやく「存在の十全性」を達成するとされる [Viveiros de Castro 1992: 254]。よって彼ら生者の社会は、まさに他者によってこそ存立しているとされる。他者とは、「社会的身体そのものの存在の源泉」なのである [Viveiros de Castro 2011: 263; cf. Seeger et al. 1979]。これらの社会は、社会内部の何らかの実体的な構造によって内的に自立しているのではなく、むしろ他者（その特権的な形象の一つが食人する敵としての神々である）が社会の外部にいることによってこそ自立している——あるいは、**他律的に**成立しているとされるのだ [cf. Viveiros de Castro 1992]。

ではこうした先住民社会の思考と、人類学者の思考といかなる関係にあるのか。ここで

5) ヴィヴェイロス・デ・カストロにおける「存在論」の語法は、1章で整理した区分で言えば、複数の多様、相対的なものに分類される。それは、彼が各所で様々な存在論を「西洋的」とか「アマゾニア的」などの地域的な形容詞を付け、相互に弁別することからも明らかである [e.g. Viveiros de Castro 2015]。

着目に値するのが、「翻訳 (translation)」である。

良い「翻訳」とは、異他の概念をして翻訳者の概念装置を歪ませて転覆させ、原語の意図が人類学者のそれを通じて表現されるようにし、そうして後者を変容させるようにするものである。翻訳、裏切り、変容。[Viveiros de Castro 2009: 54]

フィールドの人々の思考と出会ったとき、人類学者は手持ちの概念を再構成する必要があるという点は、ストラザーンと原理的に共通している。ヴィヴェイロス・デ・カストロにおいては、これがさらに以下のように整理される。アラウエテの生者が食人する神と出会って彼らにとっての他者である神に変身してしまうのと同様に、人類学者の概念も、彼らにとっての他者であるフィールドの人々の思考に出会うことで別の概念へと変容する。「異他の概念」と出会うことで、「翻訳者の概念装置」が「変容」するのだ。すなわち、概念創造とは、翻訳によって生じる、手持ちの概念の「変容」であると言える。

さらに、こうして「変容」した人類学者の概念は、決してフィールドの人々の思考と合致するとはされない。これもやはり、フィールドの人々の思考を移植したことから導き出される論点である。各所で言及される有名な例——ビールと血——から考えよう。アマゾニアの先住民にとって、人間の血は（ある意味では当然だが）血である。一方で、先住民にとって特権的な他者——ヴィヴェイロス・デ・カストロのいう「敵」——であるジャガーにとっては、人間の血はキャッサバのビールであるという [e.g. Viveiros de Castro 1998]。ある事物を人間は「血」と概念化し、ジャガーは「ビール」と概念化するのだ。それは決して、同一の事物を異なる見方で捉えているのではなく、人間とジャガーというそれぞれの観点からは、1章で見たように別の異なる事物なのだとされる。

こうした概念化の差異を生み出すのは、いわゆる多自然主義と呼称される、種の間——例えば人間とジャガーの間——身体の差異、あるいは情動の差異だという。それは「情動、傾向性、能力」の差異であり、そこでいう身体とは「示差的な実体や固定的な形態の名前ではなく、ハビトゥスを構成する情動の集合あるいは存在の仕方である」[Viveiros de Castro 1998: 478; cf. 2004: 6, 2009: 39-40]。そして、例えば「動物は私たちと同じ仕方で異なるものを見る。というのも彼らの身体は私たちの身体と異なるからである」[Viveiros de Castro 1998: 478]。ここで「同じ仕方」と言われているのは、概念形成を行うという点では、動物も人間も同じということである。しかし、両者は身体が異なり、結果取りうる情動も異なる。よって、両者とも概念化するという点では共通していても、

そうして形成される概念自体は別物である——1章で見たように概念は事物と同一である、つまり「異なるものを見る」——のだ。

ここで重要なのは、この概念的差異の関係が、先住民と人類学者の間関係にも当てはまるということだ。彼はこう述べる。「もしスピノザが言ったように私たちは身体が何をなしうるか知らないのなら、私たちはそのような身体が何をなしうるかははるかにもっと知らないだろう」[Viveiros de Castro 2015: 37]。ややトリッキーな表現だが、ここで「私たちが人類学者（ないしは、広く西洋の人々）を指していること、そして「身体が何をなしうるか」がいかなる情動を取りうるかとほぼ同義であることを考慮すると⁶⁾、フィールドの人々（「そのような身体」を持つ人々）と人類学者が異なる身体的情動を取りうるということが示唆されている。

概念創造の水準でパラフレーズすれば以下のようになる。「変容」し翻訳された概念と、その翻訳の源泉となったフィールドの人々の思考は、同じ事物に対する相異なる見方ではなく、身体的情動の差異に起因して常にズレている。「私の観点は、ネイティヴ自身のそれたり得ず、ネイティヴと私の関係についての観点でしかない」[Viveiros de Castro 2015: 16] し、人類学者は「先住民のように考えることができない」[Viveiros de Castro 2009: 169]。よって、翻訳が両者の概念上のズレを露わにするという意味において、「翻訳とは、差異化という操作——差異の生産——となる」のであり[Viveiros de Castro 2004: 20]、よって翻訳は本質的に「言い間違い (equivocation)」[Viveiros de Castro 2004]⁷⁾ なのだとされる。

以上をまとめよう。ヴィヴェイロス・デ・カストロもストラザーンと同じく、フィールドの人々の思考に即すことで人類学者の概念の更新を企図する。確かに、ヴィヴェイロス・デ・カストロはストラザーンよりも、フィールドの人々と人類学者の間の差異（の生産）を強調しているように見える⁸⁾。しかしこのストラザーンとの違い自体が、ヴィヴェ

6) おそらくこの引用の言い回しの源は、ドゥルーズのスピノザ論である [Deleuze 1981]。

7) このequivocationという語を檜垣と山崎は「多義性」と訳出するが、ヴィヴェイロス・デ・カストロの鍵概念である「多様性 (multiplicité)」と区別しづらい [ヴィヴェイロス・デ・カストロ 2015]。彼の母語であるポルトガル語でequivocarseという動詞が「誤る」という意味を持つため、ここではその意味により忠実な訳語として「言い間違い」と訳した。それは、語義の面のみならず、翻訳が「差異の生産」であるという主張にもより即した訳語と考えられる。

8) 本稿の目的を達成する上で両者の方法論的共通点に着目するだけで十分なため、細かな異同については検討しない。ただ、以下の二点だけ挙げておく。一つは、両者のパースペクティブ概念についてである。両者はこの概念について集中的な議論を展開しており、相互に影響を与え合っ

イロス・デ・カストロがフィールドの人々の思考を利用したまさにその帰結であることに留意すべきだろう。ジャガーと人間の（情動の差異に起因する）差異の関係が、フィールドの人々と人類学者の思考の関係にも当てはまる——フィールドの中にある差異の論理を、フィールドの人々と人類学者の関係に転置したのだ⁹⁾。人類学者とフィールドの人々は、アラウエテの生者が神々と異なるのと同様に、異なる¹⁰⁾。すると、方法論的な観点からすれば、この違いは、あくまでも両者が各々見出したフィールドの人々の論理に従った結果生じたものと言える。一方でストラザーンはイメージ間の論理を利用してそこに民族誌も並置させ、他方でヴィヴェイロス・デ・カストロはフィールドの中の差異の関係を転置

いる。これは、ホルブラッドとピーダーセンが簡便な入り口を提供している [Holbraad & Pedersen 2017: 152-153]。

もう一つは、概念創造の反復に関わる。ストラザーンには、イメージが並置されるいわば順列関係が、原理上無際限に延長していく図式がある。イメージは次のイメージを生み、そのイメージがさらに別のイメージを生み、と連鎖的に延長され、創造された概念は別の文脈へとさらに移植され、そのまま未来へと連続して、さらに概念創造が継起する [Strathern 2004: 119=2015: 282; cf. Strathern 1999: 163; Holbraad & Pedersen 2017: 143]。これは概念創造の延長的反復とも呼べるだろう。他方ヴィヴェイロス・デ・カストロは、こうした概念創造の時間的、並列的連鎖よりも、むしろ創造された概念と、それに対応するフィールドの人々のもつ概念の間の一つの差異により強く焦点を充てる。ストラザーンに似て、翻訳によって生産される差異を反復して生み出すことは彼も言及するが [Viveiros de Castro 2009: 9]、それと同時に、ある一つの「言い間違い」をさらに「言い間違」えるというふうには、一つの「言い間違い」がそれ自体の上に多重化されることにも言及する [Viveiros de Castro 2004: 10]。彼の一つの差異の深くに潜り込むような方向性は、おそらく構造主義の差異の理論（の再解釈）に対する彼自身の態度に相関している。彼が別所で構造主義における二項対立という最小の差異がそれ自体で無限で内包的であると論じることからして [Viveiros de Castro 2012]、彼にとり差異は一つあるだけで考察には十分であると考えている節があるように思える。このように彼においては、（あたかも通時性と共時性の軸に対応するかのように）差異の延長的反復と内包的反復がない交ぜになっている。両者のこの違いが単なる強調点の違いによるものなのか、あるいは背景とする先行研究の違いなのかなどは未だ筆者には不分明である。別稿に譲りたい。

9) これは、ロイ・ワグナーにおける「慣習 (convention)」と「発明 (invention)」の間の関係と同型である。ワグナーによる人類学者の慣習的な文化概念と、発明としての文化概念のこの関係を [Wagner 1981]、ヴィヴェイロス・デ・カストロはより洗練させたとも言える。

10) ヴィヴェイロス・デ・カストロは人類学者をシャーマンに例え、シャーマンがアラウエテの生者と神々の間を行き交い両者を差異あるまま疎通させるように、人類学者も、他者との差異を横断した疎通をなす役割を果たすかのように論じている [Viveiros de Castro 2004: 7; cf. 1992: 218-238; 2011: 459-472]。しかし、シャーマンが人類学者のように「言い間違い」をするのかについて記述はなく、この比喩も、差異の疎通という点に限定された部分的なものに過ぎず、よってどれほど比喩として成功しているかには議論の余地が大きいと言わざるをえない。

する——しかし両者とも共通してフィールドの人々の思考を利用することで、手持ちの概念の変容を試みている。

3. 概念「創造」という問題：主体の弱さから

以上のように存在論的転回は、フィールドの人々の思考を人類学に移植し、新しい概念を創造しようと試みる。その意味で存在論的転回は、フィールドの人々の思考に最大限依存することで、概念創造をなそうとする。しかし、なぜ彼らの思考に頼る必要があるのか。ヘナレらは、「我々の概念（…）は定義上、異なる概念を翻訳するには不十分なはずであるという控えめな——とはいえ、この見方からすれば明白な——承認をもたらす」と述べる [Henare et al. 2007: 12]。つまり、人類学者はフィールド人々の思考を表現するのに、十分な思考主体ではないからなのだ。さらにこのような主張はその根底で、思考の主体の位置を再配分し、その位置をフィールドの人々に積極的に与えようとしているとも言える。いわば人類学者は、彼らと向き合うとき、むしろ相対的に弱い思考の主体であると言えるだろう。「弱い」というのは、人類学者はフィールドの人々の思考を理解するにあたり、フィールドに赴いた時点ではまさに不十分な概念しか——例えば、粉は力を持たないとか贈与品は魂を持たないなどの概念しか——用いていないからだ¹¹⁾。ストラザーンはメラネシアの論理をいわば借用し、そこに彼女自身の民族誌を並列させる。ヴィヴェイロス・デ・カストロに至っては、アマゾニア先住民の思考を借用してもなお、あるいは借用するからこそ、人類学者は本質的に彼らの概念とは異なるものを生み出してしまう——「言い間違い」してしまうと言う。すると、フィールドで起こる様々な事象について真に適切に思考している主体がいるとすれば、それはフィールドの人々であって、人類学者ではない。そのとき、フィールドについて何がしかを思考しようとする人類学者は、必然的にフィールドの人々に対して相対的に弱い、不十分な思考の主体にとどまるのだ。

このように考えれば、存在論的転回が目論みが概念創造にあると言うのは——ときに概

11) 人類学者が弱化する主体性の再配分の試みは、いわゆるポストモダン人類学にも見られる。ポストモダン人類学が表象の危機において、民族誌の特権的著者としての立場を人類学者から奪い、フィールドの人々の声を直接民族誌に掲載するなどの戦略を採ったとき、いわば人類学者は民族誌の中にこだまする多数の声の一つに自らを切り下げたと言えるだろう [Clifford 1986: 14-17; Tyler 1986: 125-126; cf. Strathern 2004: 11-13=2015: 80-86]。とりわけタイラーが明確に主張するように、このとき人類学者はもはや異文化の表象主体ではなく [Tyler 1986: 130]、民族誌という言説を構成する、部分的な言表の主体の一つであると言える。

念創造は「自己変容 (self-transformation)」だとも言われるが [e.g. Holbraad & Pedersen 2017: 186] ——誇張に響く。中空と田口、ホルブラッドとピーダーセンが具体的な概念の創造過程を論じたように、確かにこの方法によって新しい概念は生まれる。しかし、その方法はフィールドの人々の思考に接続することを条件としており、よって人類学者の概念はそれ自体で変容するわけではない——創造にせよ変容にせよ、そのためには他性（の生産）がおよそ必ず要請されるのだ（この点で、ヴィヴェイロス・デ・カストロは「自己変容」とか「自己原因」と主張するときもあり、矛盾を犯しているように見える [e.g. Viveiros de Castro 2009: 60; 2015: 42]）。もちろん、創造という行為が一般的に無からなされるものではないとか、「自己変容」という語の「自己」はひとりでにという意味ではないとか、これらが単に装飾的な修辭以上のものではないと考えるのは簡単である。しかし、概念創造に集中するあまり人類学者が創造主体であるかのように描かれたとき、ヴィーギとサウスダルが警告していたように、それはフィールドの人々との関係を実質的に看過しかねない [Vigh & Sausdal 2014]¹²⁾。問題なのは、概念創造とか自己変容といった語に表れている、ホルブラッドとピーダーセン自身が認めるような存在論的転回の過剰に「断定的な文体と独断的な口調」 [Holbraad & Pedersen 2017: 156] である。それは、ともすれば、存在論的転回が——その語における虚偽という意味を考慮すれば——イデオロギーになりかねない危険を有することを示唆している。

しかし、以上に示したように人類学者は概念を創造しないのならば——先のヘナレらの引用にあるように「控えめ」に——人類学者の思考の弱さを肯定する必要があるだろう。概念を人類学者が創造することもないし、それが自己変容するわけでもない。存在論的転回の理路に即し、フィールドの人々の思考に即すならば、イメージが常に別のイメージを必要としアラウエテの生者が神々を必要としているのと同様に、人類学者もまた他者を必

12) これに加え、しばしば存在論的転回概念創造という論点は、フィールドの人々と人類学者——あるいは西洋——の差異を強調するあまり他者性の物神化を招くという批判もある [e.g. Bessire & Bond 2014; Vigh & Sausdal 2014]。これについて中空と田口はストラザーンに即しつつ、創造される概念は人々の思考の忠実な描写を目的とせず、別の地域などで再文脈化される暫定的なものなのだから、他者を本質化しないと答える [中空・田口 2016]。本稿は彼女らの反批判を補強できる。他者性の物神化が、他者性が既に与えられ、差異が固定され本質化されるとの批判であるとすれば、とりわけヴィヴェイロス・デ・カストロが論じるように、むしろ差異はフィールドの人々と人類学者が出会うたびに、その都度生産され直され続けると言える。「誰も人類学者として生まれないし (…) 同様に誰もネイティヴとして生まれない」 [Viveiros de Castro 2015: 47]。他者性は固定され本質化されたものとして与えられているのではなく、その都度生産され続けると言えるだろう。

要としているのだ。すると、創造や自己変容に替わり、**他律的変容**といった語で呼びうるだろう。他者が他者を必要とするならば、人類学者もまた他者を必要とする。存在論的転回にとり重要な理論的拠り所——あるいは「戦友」[Holbraad & Pedersen 2017: 183]——である哲学者ジル・ドゥルーズが、思考は他者によってこそ始まると述べたのとまさに同様に [Deleuze 1968: 173], 人類学者による概念の変容は、まさにその相対的弱さのゆえにこそ、他者によって可能になるのだろう。

4. 結論と展望

以上のように、存在論的転回における概念創造は、人類学者の思考が他者たるフィールドの人々の思考に（並列的に、差異の関係を転置しつつ）接続し、それを利用することが条件である。そしてこの根底には、人類学者とフィールドの人々の思考が接続するとき、前者は相対的に弱い主体として位置し、真の意味で思考しているのは後者であるという主体性の再配分が伏在していることを指摘した。その意味で、概念創造とか、概念の自己変容という謂いには問題があり、それを可能にするのはまさに他者（の思考）によってであると考え、これを他律的変容と呼び替える必要性を指摘した。本稿はその意味で、存在論的転回の理路に即すことで、その方法論を洗練させながら、そこに内在する限界を明らかにしたと言える。

1章で指摘したように、具体的な概念の具体的な創造過程を検討するだけでは、存在論的転回にとり核心である概念の他律的変容——「創造」ではなく——という方法の半面にすぎなかった。本稿は、もう一つの半面を明確化する作業であった。このとき、これら二つの半面を総合しつつ存在論的転回が人類学という知にとり持ちうる意義を検討する準備ができたと言える。その際、ストラザーンとヴィヴェイロス・デ・カストロの方法の具体的違いが¹³⁾、両者がフィールドに見出した人々の思考の論理のそれに起因するとはいえ、両者だけに限らずそうした違いが存在論的転回の方法にとり、どれほど重要なのかを検討する課題がある。それは、この方法内部の具体的な違いをより本格的に相対化する課題である。これらの課題、すなわち二つの半面を総合し、他律的変容という方法内部の具体を相対化するという課題については、別の機会を待ちたい。

13) これについては注8も参照されたい。

参考文献一覧

- 相原健志 2016 「食人, 『翻訳』, コナトゥス——E. ヴィヴェイロス・デ・カストロにおける存在論の含意と射程」日本文化人類学会第 50 回研究大会発表要旨集 (https://www.jstage.jst.go.jp/article/jasca/2016/0/2016_H01/_pdf) (最終閲覧日: 2017 年 9 月 24 日)
- Bessire, Lucas & David Bond. 2014 “Ontological Anthropology and the deferral of critique.” *American Ethnologist*. 41 (3): 440-456.
- Blaser, Mario. 2014 “Ontology and indigeneity: On the political ontology of heterogeneous assemblages.” *Cultural Geographies*. 21 (1): 49-58.
- Clifford, James. 1986 “Introduction: Partial truths.” In: James Clifford and George E. Marcus (eds.) *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkley: University of California Press, pp. 1-26.
- Deleuze, Gilles. 1968 *Différence et répétition*. Paris: Presses Universitaires de France.
- 1981 *Spinoza: philosophie pratique*. Paris: Les Éditions du Minuit.
- Deleuze, Gilles et Félix Guattari. 1991 *Qu'est-ce que la philosophie?* Paris: Les Éditions du Minuit.
- Henare, Amilia, Martin Holbraad & Sari Wastell. 2007 “Introduction: thinking through things.” In: Amilia Henare, Martin Holbraad & Sari Wastell (eds.) *Thinking through Things: Theorising artefacts ethnographically*. London: Routledge, pp. 1-31.
- Holbraad, Martin & Morten Axel Pedersen. 2017 *The Ontological Turn: An Anthropological Exposition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jensen, Casper Bruun & Kjetil Rødje (eds.) 2010 *Deleuzian Intersections: Science, Technology, Anthropology*. New York: Berghahn Books.
- 春日直樹 2011 「人類学の静かな革命——いわゆる存在論的転換」春日直樹編『現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィへ』世界思想社, 9-31 頁。
- 久保明教 2016 「方法論的独他論の現在——否定形の関係論に向けて——」『現代思想』44 (5) : 190-201.
- マニグリエ, パトリス 2016 「形而上学的転回? ブルーノ・ラトゥール『存在様態探求 近代人の人類学』について」『現代思想』(近藤和敬訳) 44 (5) : 98-112.
- 森田敦郎 2011 「民族誌機械——ポストブルーリズムの実験」春日直樹編『現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィへ』世界思想社, 96-120 頁。
- 中空萌・田口陽子 2016 「人類学における『分人』概念の展開——比較の様式と概念性の過程をめぐって」『文化人類学』81 (1) : 80-92.
- Pedersen, Morten Axel. 2013 “Islands of nature: Insular objects and frozen spirits in northern Mongolia.” In: Kirsten Hastrup (ed.) *Anthropology and Nature*. London: Routledge, pp. 96-107.
- 里見龍樹・久保明教 2013 「身体の産出, 概念の延長——マリリン・ストラザーンにおけるメラネシア, 民族誌, 新生殖技術をめぐって」『思想』1066 : 264-282.
- Scott, Michael W. 2013 “The anthropology of ontology (religious science?)” *Journal of the Royal Anthropological Institute (N.S.)*. 19 (4): 859-872.
- Seeger, Anthony, Roberto da Matta, e Eduardo B. Viveiros de Castro. 1979 “A construção da pessoa nas sociedades indígenas brasileiras”. *Boletim do Museu Nacional*. 32: 2-19.
- Strathern, Marilyn. 1999 *Property, Substance and Effect: Antropological Essays on Persons and Things*.

- London: Athlone Press.
- 2004 *Partial Connections*. Walnut Creek: Altamira Press. (マリリン・ストラザーン 2015 『部分的つながり』 (大杉高司・浜田明範・田口陽子・丹羽充・里見龍樹訳) 水声社)
- 2014 “Reading relations backwards.” *Journal of the Royal Anthropological Institute (N.S.)*. 20: 3-19.
- Tyler, Stephen A. 1986 “Post-modern ethnography: From document of the occult to occult document.” In: James Clifford and George E. Marcus (eds.) *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley: University of California Press, pp. 122-140.
- Vigh, Henrik Erdman & David Brehm Sausdal. 2014 “From essence back to existence: Anthropology beyond the ontological turn.” *Anthropological Theory*. 14 (1): 49-73.
- Viveiros de Castro, Eduardo. 1992 *From the Enemy's Point of View: Humanity and Divinity in an Amazonian Society*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 1998 “Cosmological deixis and Amerindian perspectivism.” *Journal of the Royal Anthropological Institute (N.S.)*. 4: 469-488.
- 2004 “Perspectival anthropology and the method of controlled equivocation.” *Tipiti: Journal of the Society for the Anthropology of Lowland South America*. 2 (1): 3-22.
- 2009 *Métaphysiques cannibales: lignes d'anthropologie post-structurale*. Paris: Presses Universitaires de France. (エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ 2015 『食人の形而上学——ポスト構造主義的人類学への道』 (檜垣立哉・山崎吾郎訳) 洛北出版)
- 2011 *A Inconstância da alma selvagem – e outros ensaios de antropologia*. São Paulo: Cosac Naify.
- 2012 *Radical Dualism: A Meta-Fantasy on the Square Root of Dual Organizations, or a Savage Homage to Lévi-Strauss*. Ostfildern: Erschienen im Hatje Cantz Verlag.
- 2015 *The Relative Native: Essays on Indigenous Conceptual Worlds*. Chicago: HAU.
- Wagner, Roy. 1981 *The Invention of Culture*. Chicago: The University of Chicago Press.